兵庫県現代詩協会　会報５３号

２０２３年７月１日　発行：時里二郎

「新年度に寄せて　詩の言葉は呼吸している」

兵庫県現代詩協会の２０２３年度の総会が５月７日に開かれ、新しい役員が決まりました。会員のみなさんの詩の活動や、会員相互の親睦をより深いものにするために、新役員は、それぞれの役割を分担して、今年度も色々な催しを用意しています。

新しい試みとして、昨年度に刊行した会員の詩を集めたアンソロジーである『ひょうご現代詩集２０２２』について、それぞれの詩を読み合い、詩について語る会（６月１８日）を開いたり、新しい会員を募るための活動もはじめています。

また、協会の重要な催しの柱である『ふれあいの祭典　詩のフェスタひょうご』においても、今もっとも活躍しておられる詩人をお招きしての講演を計画しております。そのほか、読書会や文学紀行などの恒例の催しも、担当理事によって鋭意企画が進んでいます。

詩は、もちろんひとりで書くものですが、詩の言葉はひとりのものではありません。言葉はいつも呼吸しています。呼吸とは「取り入れて―出す」こと。詩の言葉はその運動そのものです。それは自分の呼吸と重なっていると同時に、他者や時代や世界の呼吸とも同期しています。それらが共鳴しあって、自らの詩の言葉は生き生きとしたものになっていくのだと思います。協会の活動が、その手助けになればと念じております。ぜひ、いろいろな催しに参加して、自らの言葉を養う糧にしてほしいと思っています。

会員皆さんの新しい詩の言葉に期待しています。

時里二郎

■兵庫県現代詩協会第27回定期総会報告

２０２３年５月７日、神戸市中央区文化センター１１０３号室において行われた。定刻に始まり、時里二郎会長が開会の辞を述べ、今年度の協会の特色のあるとりくみなどを伝えた。また、協会発行の『ひょうご現代詩集２０２２』が『現代詩手帖』の書評欄に紹介されたことを報告した。

次に、司会の高谷和幸より参加者２９名、委任状４７通、と報告し総会が成立することを告げた。議長選出に移り、神尾和寿会員が選ばれた。議事進行は以下の通り。

①　入退会者報告　　事務局長　山本眞弓
②　２０２２年度活動報告　　同
③　２０２２年度決算報告　　会計担当　玉川侑香
④　２０２２年度会計監査報告　監事福田知子
⑤　２０２３年度活動計画案　山本眞弓
⑥　２０２３年度予算案　　玉川侑香
⑦　理事・幹事の承認　新役員の紹介　時里二郎
⑧　新名簿に「会員以外への複写・譲渡を禁ずる」ことを付記する。

全ての議案に対して、全員一致で承認された。

⑨　議長退任

新役員（２０２３年総会から２０２５年総会まで）

会長　時里二郎　副会長　神田さよ
事務局長　野口幸雄　会計　玉川侑香
常任理事　安西佐有理・大西隆志・大橋愛由等・北野和博・高谷和幸・高木敏克・福永祥子・福田知子・丸田礼子
理事　後藤益男　監査　梅村光明・森田美千代

今年度の活動計画

1　総会
2　詩のフェスタひょうご２０２３
3　ポエム＆アートコレクション・特別イベント・詩の現在展
4　名簿発行
5　会報発行
6　読書会
7　文学紀行
8　ホームページの活用
9　『ひょうご現代詩集２０２２』参加者の集い
10　新会員拡大に向けての活動
11　理事会・常任理事会・詩のフェスタひょうご実行委員会
12　「安水稔和さんを語る」会（４月に終了）
13　その他

休憩の後、第２部が高谷和幸氏の司会で始まった。今回の講師梅村光明氏が「詩人と連句、詩人の連句」について講演した。詩人による連句について興味深い講演であった。次に新入会員による朗読が行われた。飯島小百合、河原真紀、里園美

苗、岩堀純子以上4名。閉会の挨拶を副会長神田さよが行い、総会は終了した。

報告　神田さよ

■二部　梅村光明氏講演『詩人と連句、詩人の連句』
古くて新しい詩世界へのひろがり

文　福田知子

詩を書き、ときに連句をちらり齧っても、常時、連句を続けている詩人は少ない。連句の達人である詩人・鈴木漠氏の連句の愛弟子である梅村光明氏は、長期にわたり連句に携わってこられた稀有な詩人である。

講演は、連句の歴史から始まって、最初に詩人に連句のきっかけをもたらした安東次男、そしてその呼びかけにこたえた大岡信のこと。そして、それらの創作裏談義を「図書」（一九七四年三月号）で読んで連句に出合った高橋順子。さらに結果的に連句を愉しめなかった詩人として辻征夫をあげ、最後に鈴木漠氏の仕事を紹介し、彼の果敢で新しい押韻連句への挑戦を顕彰された。

聴いている私たちにとって、とても新鮮かつ難解な内容だった。しかしながら、連句史上重要な書物を時系列に沿って丹念に紹介・検証しながらの話は、興味深く、説得力があった。

まず歴史から――〈唱和〉、〈問答〉、〈対話〉から発生した連句の起源は、古代中国に始まる。日本では『古事記』『万葉集』からはじまった。特に『万葉集』の大伴家持と尼による応答歌、さらに室町時代の短連歌、長連歌を土台とする歌仙連歌（三六句連歌）の誕生へと。

そして、貨幣経済の発達に伴う裕福な町人層の台頭により、江戸時代には私たちにも馴染みの松尾芭蕉、小林一茶、与謝野蕪村などの俳諧師による「俳諧の連歌」が普及してきた。

さて、詩人安東次男の連句実作のきっかけは、『芭蕉連句評釈』刊行後に、大岡信、丸谷才一、石川淳を誘い、宗匠役（さばき）を務めたことによる。一九六八年頃のこと。ただし、これは十八句による「半歌仙」だった。

その後、三十六句の歌仙一巻を目指したのは、大岡信によると、筑摩書房編集者川口澄子からの電話がきっかけとなった。

しかしこれが大変なことになった。「たかが三十六句と思ったら大変な思い上がりというもので…（略）計十三句まで行ったのが、なんと（略）午前四時。ともかくこのようにして偶然始まった私たちの連句は、（略）玄妙不可思議な苦痛と快楽の混合体となりました（略）十月十二日、山王の「山の茶屋」で開始したこの歌仙一巻を巻き上げたのは、翌年「五月五日午前三時五十五分、於流火山房」であった」と大岡は書いている。

さて、先にあげた辻征夫は『俳諧辻詩集』を上梓したきっかけとして「現代詩は痩せすぎたのではないか（略・傍点福田）江戸以来の俳句は簡潔な認識と季節感の宝庫であり、（略）現代詩にとっても貴重な遺産だった」と述べている。

最後に。『連句茶話』を刊行した鈴木漠氏は、「長らく連句実作に携わり続ける唯一無二の現代詩人である」と梅村氏は述べる。現在もなお、「海市の会」「おたくさの会」で押韻連詩を実作し続けておられる。

ひとりで書く詩の世界が「連句」というファクターによって拡がっていく可能性を考えさせられた講演だった。

■第12回ポエム&アートコレクション

今年も1月12日から17日まで、会員の詩人が綴った詩とその詩に寄せたアート作品（絵画、書、写真、彫刻、オブジェ等）を組み合わせた展覧会が神戸文学館で開催されました。会期中149名の来館者で盛況でした。出品者：相野優子・阿部由子・飯島小百合・大西隆志・大橋愛由等・後藤益男・高木敏克・高谷和幸・玉井洋子・玉川侑香・寺田操・永井ますみ・中堂けいこ・西海ゆう子・野元正・福永祥子・牧田榮子・松下玲子・水こし町子・山本眞弓以上20名でした。

（担当：福永祥子・野口幸雄）

神戸文学館作品展示（写真上）
講演：時里二郎（写真下）

■時里二郎講演
「詩を書くということ　第4回
安水稔和さんの詩に沿って」

文　大西隆志

新年が明けて少し経つと開催される兵庫県現代詩協会の行事『ポエム&アートコレクション展』の会期中、神戸文学館との共催事業でもある特別イベントとして講演会があり、当会会長の時里二郎さんが講師で、一般の方も多く参加される講演は人気があった。詩を書くということ」をテーマにした時里さんの現代詩への思いを語る内容で、今回が4回目で連続した演題の仕上げでもあった。時里詩論が少しでも形になる予定だったが、初代会長の安水稔和さんの訃報もあり、安水稔和さんの詩を通しての講演と急遽なった。安水さんの逝去は遺族によって伏せられていたことで、神戸新聞に載った訃報報道で知ったのが昨年の十月九日。八月十六日に亡くなられていた。時

里さんのテーマも安水稔和さんの詩に絞られた。このレポートを書きながら、時里さんにとっては詩におけるあらたな視点が追加されたのではないのか、と思えた次第。ある意味では、安水稔和の全体的な詩業はあまり語られてはいないように思えたからだ。

時里さんの講演は安水稔和さんとの出会いから始め、安水さんと僕との繋がりは、お目にかかることはあったが、世間話をしただけ。面と向かって話したことはない」と。ある意味で詩人論と言うよりも、純粋に安水稔和詩との向き合いとなる詩作品論に期待を寄せた。時里さんは1984年に神戸のブルーメール賞を受賞。選考委員であった安水さんの言葉が嬉しかったと語る。同年には君本昌久さんとの共編選詩集『神戸の詩人たち―戦後詩集成』も上梓された。時里さんが兵庫・神戸の詩人(安水稔和、君本昌久、多田智満子、鈴木漠、季村敏夫)たちとの交流が始まった時期でもある。

安水さんの詩に沿ってとあるように、時里さんは五十年代詩人としての安水稔和詩を見ていく。最初の詩集は二十四歳で出した『存在のための歌』、連続して『愛について』『鳥』と三冊の詩集。『櫂』の谷川俊太郎、大岡信、友人でもあった『鰐』の飯島耕一などとも共鳴しているように「歌っている、歌のエネルギー」をと。比喩の効果的な力や、翻訳文体と論理的なあり方。そこには、私と世界との齟齬、捻れ、亀裂とする、六十年安保の挫折感や、言葉により語られた世界とのギャップ。そして言葉の問題。これらの詩集としては『鳥』は五十年代に書かれた優れた詩集だと時里さんは語り、絶えず新しい表現や比喩の精度を求めることへの懐疑があったのではとも問う。時里さんの詩集『鳥』とかに使っていた言葉に限界を感じたのかも」との指摘は、刺激的でもあり詩作の深まりを感じたのだった。

その後は、『能登』を経て『西馬音内』へとレジュメに記されているように、菅江真澄との同行が始まるのだ。菅江真澄を見出すことで、戦後詩の流れに対する懐疑でもあった。真澄の眼差しと詩人の眼差しにより、私を消すことで見えてきたものの、あり様。それは意味の外側の世界に出て行く手応えのようだと。意味の世界ではない、目に入ったことをトレースすること。菅江真澄の発見は安水稔和さんにとってはその後の震災での眼差しにも繋がっていくようだ。晩年まで書かれてきた地名詩と呼ばれる六百をこえる詩篇へと続く。そこには「個を消すための詩」があり、地名は言葉そのものだと書かれている。時里さんのレジュメから引用する文章に「詩は、言葉では言い表せない世界(意味の外の世界)を言葉で言い表そうとするその断念から始まる。そこには深淵がある。しかしそこに何があるかわからない。そしてそこに言葉を落としてみる。ただ落としてみる」と。菅江真澄の方法を使い、自分の体験にこだわらない。詩は土地の霊の燠火のようなもの。誰でもない言葉、あなたの言葉で、わたし一人の言葉ではない。あの人の詩である。安水さんの言葉に「書くしかないとおもい、書いて少し元気になり、書くことが生きていく支えになるとこの時実感した」と、揺れて燃えた町で安水稔和さんは書いていた。

時間の関係もあり、安水さんも加わっていた『蝸牛』グループの意義、時里さんが安水稔和さんの詩に影響を受けたこと、の二点については時間切れとなった。時里さんの詩集『石井島』の方法との関連も話される機会を見守りたい。今回の講演では果たされなかった「詩を書くということ」のもう一回分により大円団を迎えてもらいたい、と願っている。

新役員・役割

会長：時里二郎　副会長：神田さよ
事務局長：野口幸雄
会計：玉川侑香
入退会名簿：安西佐有理
ポエム＆アートコレクション：福永祥子・福田知子
議事録：神田さよ
ホームページ：北野和博
会報：高谷和幸
アンソロジー・会報特別号：大橋愛由等
読書会：丸田礼子
拡大推進（仮称）：野口幸雄・高木敏克
文学紀行：大西隆志
理事：後藤益男
監事：梅村光明・森田美千代
詩のフェスタひょうご実行委員会事務局：野口幸雄

■第23回読書会

文・神尾和寿

二〇二二年十一月十九日（土）に、第23回読書会「黒田喜夫の詩について」が、兵庫県民会館にて催されました。チューターは、髙木敏克氏（写真）であります。

髙木氏は、「今は時代を遡って黒田喜夫の時代の詩を理解できる絶好の機会だと思います」と訴えます。つまり、そこには、過ぎ去った時代の「体験」から詩作品を読解するのではなく、逆に、まず詩作品に接することからあの時代とこの時代とを切り結ぶ社会状況が意識されてくるのではないか、という問いかけがあります。

こうしたスタンスを前提として、始めに、黒田の生い立ちが辿られていきました。家庭の貧困や山形県の陰鬱な風土のなかで、社会変革の意識が、黒田のなかに芽生えていきます。戦後は、共産党員となり、しかも職業革命家たらんことを決意します。しかし、結核の発症によって、その活動に制限が強いられてしまいます。また、同時進行として、いわゆる戦後詩の洗礼を受け、一九五四年に「列島」に参加します。こうして、日本共産党の武闘方針やハンガリア動乱に代表される反スターリニズムなどの共産主義における挫折や葛藤の「体験」を踏まえて、「ハンガリアの笑い」や「毒虫飼育」や「空想のゲリラ」といった傑作(あるいは問題作)が誕生していきます。

髙木氏は、黒田の詩作の特質を、とくに政治活動と詩作とのいわば弁証法的な関係に求めていたようでした。そして、その関係は、矛盾対立と相互的反映を兼ねるような、とても一筋縄ではいかない緊張に満ちたものでありました。「詩」かそれとも「政治的なもの(反詩)」かという二者択一を迫る谷川雁

のような立場に対して、黒田は「詩」にして「政治的なもの（反詩）」でもあるものを目指していたのではないか、というのが、高木氏が展望するところです。すなわち、両者の矛盾を止揚して互いを保持し活かし合う、高度な次元の「詩」への突破です。

ただし、そうした運動は、一回性のものではないのでしょう。いったんは獲得された融和のなかで、「詩」と「反詩」とのより深くて鋭い矛盾対立が、またあらためて見出されていくはずです。

このような考察は、黒田の詩作を対象としてだけには止まりません。それは、学生時代を政治活動家として過ごしながらも文学に携わり続けてきた高木氏自身の、自己省察でもあります。よって、一時間余りにわたる解説は、終始、熱のこもったものとなりました。主体的で、実感がみなぎっておりました。

最後に、高木氏が黒田の詩作の意義を現代において次のように位置づけていたことを、確認しておきます。すなわち、「『日本資本主義は、着々と、いくどもねじれながら、『自然回帰＝日本回帰』へと国民を動員しつつある。黒田喜夫不在の三十年とは、わたしたちの敗北の年月に他ならないのだ。それゆえ、ひさしく彼岸へと忘却されてきた黒田喜夫は、これまで以上に、むしろこれから読まれ、反芻される契機をもつ」のであると。

■第二四回　読書会予告

2023年7月22日（土）

会場　神戸市教育会館
205号室　午後一時～

峯澤典子の詩について」

チューター　高橋冨美子

申し込み締め切り7月15日

■第九回文学紀行《酒と文化の薫る伊丹の町ぶらり歩き》

文・安西佐有理

文学紀行は今年も幸い好天に恵まれた。三月一九日、会員有志の参加者を含め、いまだどこもマスク姿ばかりとはいえ各所に人出があり、陽射しにも街路の空気にも春を感じる。

集合地点のJR伊丹駅からは、友好と平和を願ってベルギー・ハッセルト市から贈られたカリヨンを設置する記念塔「フランドルの鐘」のまちかを通り、三分ほどは咲いた枝垂れ桜を眺めながら、あっけなく第一の目的地である国指定史跡、有岡城跡（主郭部）に到着した。建物こそないものの、約四五〇年前の石垣が整然と復元され、柱や堀、井戸の跡もはっきりと示されている。さっそく皆そろって、記念写真を撮影した。「はなはだ壮大にして見事」とルイス・フロイスが記した有岡城は荒木村重の城として名高いが、現在の史跡公園となるはるか前にも、城跡がただ荒廃して滅するのを惜しみ、語り継ごうとした人々がこの地にいたことは、この場に来て初めて、明治期に建てられた「懐古園」碑文から知った。史跡にふさわしく、歌碑もある。ひとつは『信長公記』に遺る、荒木村重夫妻が落城を前に交わした和歌「霜かれに残りて我は八重むくらなにはのうらのそこのみくつに」「思いきやあまのかり橋ふみならしなにはの花も夢ならむとは」を刻んだもの。もうひとつ、荒木村重の入城前にここを居城「伊丹城」とした一族の伊丹之親による一首「春秋の花と月とをときならで見はてぬ夢の暁はうし」も、一四七二年の奉納和歌集から採って歌碑となっている。

文学紀行担当理事である大西隆志さんの案内で、さらに市街を歩く。伊丹の俳聖、上島鬼貫（一六六一～一七三八）の句碑「古城や茨くろなる蟋蟀」が前庭に据えられた曹洞宗の荒村寺。一七世紀の本堂を擁する日蓮宗の本泉寺。曹洞宗の墨染寺へと進めば、鬼貫の親子墓と、秋八物の月夜烏はいつも鳴」の句碑がある。元は鬼貫の子、永太郎の墓であったという元禄の古色帯びた石とは対照的な、赤、橙、白、紫、桃と色鮮やかな仏花が一対、春の彼岸らしく供えられていた。

集合・出発から一時間ほど、駅から約五五〇メートルの法専寺付近では、またも有岡城のなごり「堀跡」の説明板を見つけた。城の気配から逃げられないまま、老松酒造の横で名水「老松丹水」を汲む人の姿を横目に歩きつづけて、市立伊丹ミュージアム（略称「I／M（アイム）」）に到着。既存の施設を統合し、二〇二二年四月に改めて歴史・文化・芸術の総合的発信拠点としてオープンしたばかりの場所だ。I／Mの前身となった文化ゾーン「みやのまえ文化の郷」を構成する施設のうち、三大俳諧コレクションのひとつとして著名な柿衞文庫や、市立美術館、市立工芸センターは一九八〇年代の開館ということで、神戸の私にもなじみがあった。市立伊丹郷町館（二〇〇一年開館）は、初めて見学した。一六七四年以来この地にあった町家・酒蔵「旧岡田家住宅」（国重要文化財）と、隣に移築された幕末の商家「旧石橋家住宅」（県指定文化財）を併せた展示施設だが、昔の建築を保存する機運の高まりには阪神・淡路大震災も影響したようだ。震災以降の年月は、なんとも早い。

I／Mでは、現存するなかでは国内最古という岡田家の酒蔵で酒造りの説明などを聞き、石橋家住宅一階のクラフトショップでは日常づかいできるユニークな工芸をお土産に物色し、展示棟に移動して階上から回遊式の日本庭園を眺める。旧伊丹市立博物館の機能を受け継いで展示される歴史資料や解説映像に見入ったあとは、柿衞文庫で「伊丹っ子作品展」に遭遇し、小中高校生の俳句俳画色紙のやわらかな感性に思いがけず刺激を受けた。美術館は展覧会の狭間で休館していたが、ミュージアム内では伊丹市芸術家協会展が開催され、ジャンルは違っても地域に根ざして創作を続ける人たちの活動に触れることができた。

清酒と俳句の街らしく、芭蕉句「夕顔や酔うて顔出す窓の穴」のパネルが柱を飾る商工会議所の前を通って、猪名野神社へ。青空へ気持ちよく伸びる神木や、花の赤が深い椿などが静かな蔭をつくり、池では亀が泳ぐ。この境内にも、有岡城の「岸の砦跡」の説明板が立っていた。町ぐるみを城塞化して南北一七〇〇メートル、東西八〇〇メートルにわたっていたというから、おしゃべりと寄り道ばかりで二時間ちょっと歩いただけで

は当然、有岡城の外に出られないのを思い知る。やはり、鬼貫の句碑もあった。鳥八未(まだ)口もほとけす初桜」。一七〇七年の句を、一八五四年に伊丹の酒造家である俳人たちが句碑とした。地元出身の鬼貫の名が広がり、伊丹の人が詩歌を楽しむのも鬼貫のおかげなので、直筆の碑によって後進にそれを示すとの経緯も、裏に刻まれている。

伊丹ゆかりの田辺聖子、宮本輝の展示コーナーがある市立図書館「ことば蔵」に立ち寄って、最後は白雪ブルワリービレッジ長寿蔵で昼食。ここで全員に投句用紙が配られた。大西さんがI／Mの投句箱にあとでまとめて入れてくださるので、「一句(一九)の日」の伊丹に来たからには俳句を作ろうというのだ。頭をひねり、あれこれ話に花が咲くと、ベルギーの醸造技術を取り入れたオリジナルのビールや、日本酒のカクテル、酒粕を使ったメニューなどを一層楽しめた。

結局、いまはない有岡城の内だけでぐるぐる周り、鬼貫にも結界を張られて、蔵・蔵・蔵とクラクラの珍道中だったのに、予想以上に盛りだくさんの時間を過ごせた。有岡城以前、古代からの歴史の蓄積。そして酒造りで栄えて俳諧・俳句の拠点となり、いまも「ことば文化都市」を目指す伊丹に流れるエネルギー。それをしみじみ感じられたのは、和歌俳諧の時代を踏まえ、現代の詩を通じて言葉と向き合う仲間たちと、実際にその地を歩けたからこそだ。

有岡城跡（写真上）
墨染寺門前（写真下）

「詩のフェスタひょうご２０２３」について

主催　詩のフェスタひょうご実行委員会・兵庫県・公益法人兵庫県芸術文化協会・兵庫県現代詩協会
日時　10月１日(日)13時30分から16時30分(受付13時から)
場所　ラッセホール・サンフラワー
〒650－0004神戸市中央区中山手通４丁目4－10－8
☎078－291－1117
講演会　講師　峯澤典子氏(詩人)　演題　未定
9月19日(火)までに葉書で申し込んでください
申込先　〒657－0846　神戸市灘区岩屋北町４丁目4－5―902　野口幸雄宛
メール：momoka.naho@sky.plala.or.jp
峯澤典子氏プロフィール　1974年茨城県筑波郡生まれ。主な著作『ひかりの途上で』(第６４回H氏賞受賞)『微熱期』(第60回歴程賞受賞)他

■安水稔和さんを語る会　報告

文・黒住考子

兵庫県現代詩協会の初代会長安水稔和氏が昨年八月一六日逝去された。報が十月にもたらされた後、氏の足跡を振り返る会が立ち上げられ四月一五日に開かれた。冒頭会長の時里二郎氏は開会の挨拶として、この会を偲ぶ会ではなくあえて語る会としたことは安水氏の多大なる功績を振り返りながら、詩の現在から未来へ、を考える会にしたいとの思いからだと述べられた。

続いてたかとう匡子さん。一八歳から六〇年余りの長いお付き合いを偲び一貫して一流の抒情詩を書くそのこだわりと執念を語られた。

次に季村敏夫さん。会報や新聞にも深いかかわりの中で感じたことを書かれていたが、神戸事件のその後について尋ねた時、微笑みながらついに何も語ってくれなかった、と話されたのが印象的。

倉橋健一さんは同年代として淋しいと述べられた後、戦後詩の中の特異な抒情詩人だったが時代のニヒリズムを背負っているやはり時代の子ではなかったかと。

その後三人の方がそれぞれに選ばれた詩を朗読の後休憩。

第二部は以倉紘平さんから。学生時代詩集「能登」を携えて何度か能登を旅したこと。「千枚田」の一節〝心を千々に砕くことはむしろやさしい。／土地をこんなに千々に耕すこと／これはいったいどういうことか。〟を引かれて詩の未来をどう拓こうとしたのかを思ったと。震災詩の焼け跡の草びらを大事にしたいという思い、詠み人知らずへの詩の方向など「ことばは記憶」というお考えの端緒だったのではないかと話された。

続いて美術家古巻和芳氏。詩と写真のコラボ作品集「降り積もる、言葉が見える」を刊行。「場の記憶を立ち上がらせる」をコンセプトに考えているとき私を消去してその先に菅江真澄を取り込む詩に出会い、時空を超えた土地の記憶に惹かれた。美術と詩とは本来非常に近い存在であることを知ったと語られた。

次に神戸新聞論説委員平松正子さん。三十年近いお付き合いで「私の訃報はあなたが書いてくださいね」と言われていたこと、新聞での公表は奥様が迷っておられた、などの経緯を話された。

最後に編集工房ノア社主涸沢純平氏。実に詩集二十六冊を含む七十冊を出されている。「私の旅は日常に帰るため」「意思を持って詩を書く」「定点観測で詩を書く」など折々の氏の言葉に触れた後奥様玲子さんを詠んだ「新山」を朗読。安水さんの旅は完結したと思うと締めくくられた。

続いて朗読の方三人。最後に氏の初めてのラジオのための作「今日も」を大西隆志さん指導のもと六人で群読。北野和博さんの閉会の挨拶で詩に関わる密度の濃い会は終わり、記念

写真を撮って散会した。

会場で用意された冊子には十二編の詩と生涯に渡るたくさんの著作目録が記されていて氏にとって書くことが生きることだったのだという思いを改めて強くした。

■詩誌「別嬢」のこと

文・高橋　夏男

この誌名のことが先ず話題にされる。意味も読みも分からないと言われるのだ。

その同人と発行所の住所・所在が播磨地方にあり、初めて仲間が寄った折、『播磨国風土記』を持参していた松尾茂夫(兵庫県現代詩協会の事務局長、のちに会長)が、古ぼけた岩波文庫の「賀古の郡」に次のような記述があるのを読み上げて提案したのである。

すなわち、大帯日子命(おおたらしひこのみこと・景行天皇)が、「印南の別嬢」(いなみのわきいらつめ)に求婚したとの事項を取り上げ、「別嬢」にしようと言い、横にいた高橋が「わきいらつめ」を「べつじょう」と音読すれば、なんだかナウイのではないかと賛成した。

瀬戸内海を見晴るかす播磨地方には、赤穂の西川昭五、相生の高須剛・尾崎美紀、姫路文学人会議」には市川宏三と会員たち、竜野の青木啓介は詩を書きながら「播磨灘を守る会」の中心になって海の汚染に立向かっていた。

そんな各地の詩人たちが、持ち回りで詩画展や小講演の催しを開いていた。その順番が加古川に来て、松尾や住吉千代美を中心に開催したのだったが、それ以後めいめいの自作を持ち寄っての月例の勉強・合評の集いを持つようになったのが「播磨灘詩話会」で、会員が作品を出し合って年刊の『播磨灘詩集』を第七号まで発行したが、それを季刊の詩誌「別嬢」の発行に発展させた。これも松尾の提案で、住吉と高橋が加わって編集・印刷から発送までしたが、八〇号あたりで松尾がダウン、高橋一人で一一五号まで来て、徳田隆一・桂木恵子・渡辺七彩に編集・発行の実務を任せ、高橋は発行所のみを担当し、一一七号を準備中である。播磨灘詩話会から別嬢へ、まさに播磨一帯の詩人たちの活動なのだが、姫路を中心とした「播州文化圏」とでも言うべき文化の気風・傾向・作風が絵画や音楽にも色濃く存在する。そんな伝統に立っての活動である。

■会員の詩集から

文・時里二郎

岩崎風子『ちから詰まる日』(思潮社)12月刊。「硝璃となって」に続く第七詩集。冒頭の「翔天トライ」はラグビーのゴールキックを蹴るシーン。

双つの手を／／すっかり刻にゆだねる少年は／／歩みなどかぞえない／／溜めていた血潮が噴き出して／／ひといき軌道は宙(そら)／／浮力は彼を弾ねかえす／／驚異仰天していく観衆の目のさま／／墜ちてくる喝采／／みずからの渇きと／／いっせいに身体をめぐる血で／／少年は／／全重量を消す」。

言葉の動きに活写される凝縮された時間と、少年の力の漲り。全行をそれぞれ一行空け、無駄な言葉をそぎ落とし、そこに気韻を詰める。書の筆鋒を見つめているような言葉の息遣いだ。

詩はふだん身につけている日常の重力から言葉をいかに解き放つかにかかっている。繰り返される日常や見慣れたこの世界や、生きてきた人生の時間に堆積している見えないものの重さ(重量)に気づくところから、詩は生まれる。この作品や「青鮫」など、若い身体と心を扱ったものばかりではなく、出自である山陰の海や土地の風土に触れた作品、またこれまでの人生を振り返った作品にも、その重量と向き合いながら言葉が現在や日常や人生を書き換えていく足取りに、それらから自由になっていく手応え(ちから詰まる日)が感じ取られる。

なによりもゆるぎない詩の言葉の充溢。そのしなやかな言葉の自在な運動に、生きて呼吸する息遣いが感じられること。振れ幅の大きい比喩も魅力だ。これほどの詩の言葉の豊かな肺活量は貴重だ。また後半の山陰の風土に根ざした一連の作品は特に秀逸。コロナ禍や鳥インフルエンザや農地の荒廃、それに厳しい風土を描いても、その言葉の根には、郷愁めいた抒情は抑えられ、むしろここから先に向けて生きようとする姿勢や眼差しが感じられる。充実した詩想の造型として、おわりまで緩むことはないのは見事だ。

野元正『薄紅色のいのちを抱いて』(幻冬舎)9月刊。短編小説集。桜、菩提樹、栃の樹といった「樹」をモチーフにした三編からなる。

表題作の「薄紅色のいのちを抱いて」は、桜専門の庭師の夫が先祖代々受け継いできた「桜の園」を、夫の死後も守って生きようとする夕子が主人公。読みどころは、夫なきあとも夕子が桜を大切に育て、桜がそれに応えるようにその生を漲らせていく、その植物と人との見えない命の交流の様である。桜は人の手なしには生きていけない植物であり、それは逆に言えば、人に委ねた自らの生を、桜は人と分かち合うために咲いているような思いにとらわれる。夕子と亡き夫が桜の命を介して魂を通いあわせるシーンは胸を打たれる。

第二作目の「菩提樹」は、町の神木の保存をめぐる作品だが、旧住民と外から入ってきた新住民との齟齬や、保存のための住民運動の様子が丁寧に、しかもリアルに描かれている。

三作目の「栃の樹異聞」は、主人公の女性と、時代を遡った説話の女性とを重ねたり、幕末に流行したコレラとコロナ禍をからませたり、さらには AI 技術までとりこんだ意欲作。随所に造園家としての野元さんの経験や知識が十二分に生きていることも言い添えておきたい。

高木敏克『神撫(かんなで)』(澪標)1月刊。「カフカ旅団」、「アヴェ・マリア」など五編の短編と中編「神撫」から成る小説集。作品のタイトルにもとられているように、カフカ的な不条理の

色濃い短編に対して、やはりこの小説集は表題作「神撫」の土俗的な血の濃密な小説空間の味わいに尽きるだろう。

とりわけ、ゲニウス・ロキとでもいうべき地霊に操られる人々。あるいは、地政学としてのもう一つの「神戸」の素顔を描いていることに注目する。海洋都市と言われるように、異人館や向日的な海の光に彩られたエキゾチシズム。その照り返しのような六甲山の文化風土も含めた神戸とは極めて異質な山間部の谷あい「神撫」の地下の水源や、それによって育まれた森や耕作地。それらが開発によってその水脈を絶たれて涸れていく。その地勢的な変化が人々を歪めていく。象徴的に語られる堀田家と神月家の濃密な血の確執が、水源や水脈の分断や変化を反映したものであることをほのめかし、それらが話者である主人公をも巻き込んでいくところはとてもスリリングで小説の醍醐味はそこに集約されるだろう。洗練された海洋都市神戸とはまるで相容れないようなもう一つの神戸のゲニウス・ロキの物語として興味深い作品になっている。

尾崎美紀 瑕の上のパン屋さん』(文研出版)2021年7月刊。詩人でもあるが、それ以上に児童文学の作家として活躍なさっている。ただ、児童文学はふだん読まないので、ちょっと見当外れな評になるかもしれない。

神戸に引っ越してきたパン好きの翔太君が主人公。彼が見つけた「食パントウジロウ」という店で、パン職人のおじいさんと出会い、食パンづくりに夢中になっていく。きっと現実にも神戸にはありそうなお店。さらにそのリアルさが、地上十センチくらい浮き上がっているストーリーの起承転結の組み立ての自然さ。登場人物も、主人公の友だちの女の子も、おしまいに出てくるドイツの留学生も、地上十センチの物語空間を彩るにふさわしい。すぐ、いつでも現実に着地することが可能な十センチの浮遊感こそ、将来の夢をかきたてる駆動力になっていること。夢物語ではなく、きちんと現実の地平を示しながら、人の生き方や、人との創造的な交流の豊かさや、日常をきちんと織り目正しく生きることの喜びを、評者ですら感じられたわけだから、きっと読者となるべき子どもたちも、豊かな読書体験を享受するに違いない。

■常任理事会報告

文・神田さよ

第3回常任理事会 11月5日(土)13時～県民会館出席9名 欠席3名 現在会員数 126名 ＊入会 1名 退会 2名 ご逝去 安水稔和(8／16)・田村周平(10／13) ＊会計9月・10月会計報告 ＊会報52号・特別号② 校正確認 52号発行 12月1日 ＊第23回読書会 11月19日(土)兵庫県民会館 黒田喜夫の詩について」 チューター：高木敏克 ＊ひょうご現代詩集2022」現在 72名参加申し込み ＊ポエム&アートコレクション・詩の現在展 1月12日(木)～1月17日(火)神戸文学館 出品者：22名 ＊文学紀行 3月19日(日) 酒と文化の薫る伊丹の町ぶらり」 参加費2000円 ＊ホームページ 玉井洋子会員のエッセイを掲載 ＊安水稔和氏ご逝去を悼む会について 実行委員会 10月14日に行った。発起人及び実行委員を決定。主催兵庫県現代詩協会 ＊詩のフェスタひょうご 10月2日 ラッセホール 参加者92名 ＊役員選挙開票1月28日(土)(管理委員：相野優子・牧田榮子・神田さよ・玉川侑香・山本眞弓)＊兵庫県現代詩協会 詩の教室」継続討議。来年度活動計画として、総会に提出。

第4回常任理事会2月4日(土)県民会館1203号室 出席11名 欠席1名＊入退会なし。＊会計報告11・12・1月 ＊会報 52号 最終校正者決定。会報バックナンバー②発行 ＊読書会報告 11月19日 チューター高木敏克 黒田喜夫の詩について」 参加者22名 ＊ポエム&アートコレクション出品者20名 特別イベント講演会 時里二郎 参加者42名 ＊文学紀行 3月19日(日)申込締切2月末 現在申し込み者数14名 ＊ひょうご現代詩集2022」 参加者数 105名 発行日 3月20日 ＊役員選挙開票報告 投票数 680通 無効票 2通 投票数順に打診。次回常任理事会で報告。＊ホームページ 掲載記事を会報で告示。＊ 安水稔和さんを語る」会 4月15日(土)中央区文化センター1103号室 ＊詩のフェスタひょうご2022 兵庫県より終了通知 ＊会員拡大の目的、仮称 詩の教室」を協議。県内各地で行う。

第5回常任理事会3月5日(日)13時～県民会館 出席 10名 欠席2名 ご逝去 西村善三 退会 2名＊会計報告・会計監査日 4月9日(日)＊ ひょうご現代詩集2022」 参加者数 101名 アンソロジー参加者の集い」提案。6月18日中央区文化センター ＊役員選出 25名の候補者宛に役員諾否の往復はがきを発送。新役員承諾 16名 ＊第27回総会 5月7日(日) 神戸中央区文化センター 総会内容について検討。第2部講演者 梅村光明。議長 神尾和寿氏に打診。 ＊文学紀行 3月19日(日)＊会報53号・別冊③発行 7月1日 ＊ホームページ 文学紀行・会員のエッセイ・アンソロジー全篇アップ。＊ 安水稔和さんを語る」会について ＊ふれあい文化の祭典 詩のフェスタひょうご2023」10月1日(日)13時～ラッセホール・サンフラワー ＊その他 会員拡大と、詩の普及のための 詩の教室」(仮称)について。

第42回理事会4月9日(日)13時～県民会館らん 出席18名 欠席2名 ＊入会岩堀純子 退会 逝去3名 現在の会員数123名 ＊3月会計報告 2022年度決算報告と監査報告 ＊新役員を承認 次年度からの役員役割を決定。総会に諮る＊第27回定期総会について 5月7日(日)神戸市中央区文化センター 総会資料を検討。役割分担。講演 梅村光明 演題 詩人と連句、詩人の連句」自作詩朗読(新入会員)5名 ＊会報53号・別冊③7月1日発行 ＊読書会 次回予定日 7月22日 ＊ホームページ 総会・みんなで語ろう ひょうご現代詩集2022」などを掲載。＊会員拡大の対策について。宝塚詩の会 現代詩講座」提示 ＊詩のフェスタひょうご 講師 峯沢典子(みねさわのりこ)氏 ＊文学紀行報告 参加者13名。

■他団体会報・詩書(2022・11月～2023・5月)

すずかけ 12月・1月・2月・3月・4月・5月号
(兵庫県芸術文化協会)
詩界通信 101・102(日本詩人クラブ北岡淳子)
群馬詩人クラブ No322・323(井上英明)
青森県詩人連盟 51号(藤田晴央)

山形県詩人会　38号（高橋英司）
兵庫県歌人クラブ　208号(安藤直彦)
福岡県詩人会　184号・185号(田島安江)
静岡県詩人会　147号・148号(土屋智宏)
岩手県詩人クラブ　101号・102号(酒井良平)
高知詩の会通信　27号・28号(林嗣夫)
島根県詩人連合　No91(川辺真)
千葉県詩人クラブNo260・261(秋元炯)
福島現代詩人会　130号(齋藤貢)
大分県詩人協会　No164・165(井手口良一)
埼玉詩人会　101号(川中子義勝)
いちご通信　34号(大分県詩人連盟)
とっとり詩人　43号(池澤貫一)
福井県詩人懇話会　109(渡辺本爾)
長野県詩人協会　No152(鹿野剛)
北海道詩人　No153(坂本孝一)
秋田県現代詩人協会　67号(横山仁)
宮城縣詩人会　34号(佐々木洋一)
栃木県現代詩人会79号(貝塚津音魚)
中日詩人会　N9206(古賀大助)
関西詩人協会　108号・109号(左子真由美)
茨城県詩人協会　No35(高山利三郎)
横浜詩誌交流会　79号(うめだけんさく)
詩人通信4月・詩人学校837号(近江詩人会)
日本現代詩人会　No170(佐川亜紀)
龍神　2月作務衣日記(こまっかん)
年間歌集2022　62(兵庫県歌人クラブ)
宮城の現代詩2022（宮城県詩人会)
熊本県詩集第16集(熊本県詩人会)
群馬年刊詩集2022(群馬詩人クラブ)
埼玉県詩人会報第102号(川中子義勝)
栃木県現代詩年鑑2022(栃木県現代詩人会)
中日詩人集2022　62(中日詩人会)
長野県詩集2022　55(長野県詩人協会)
香川県詩集2022　26集(香川県詩人協会)
島根年刊詩集第51集(島根県詩人連合)
秋田県現代詩年鑑2023(秋田県現代詩人協会)
2023福島県現代詩集（福島県現代詩人会)
岐阜県詩人集第10集　2023(岐阜県詩人会)
現代詩2023(日本現代詩人会)
鹿児島県詩集第26集(鹿児島県詩人協会)
木立ち　冬144号・春145号(川上明日夫)
びーぐる　59(松村信人)
フラジャル第17号(柴田望)
伽羅　VOL 27(吉田定一)
木偶　123(田中健太郎)
RIVIERE　187・188(正岡洋夫)
福島県現代詩人会会報第131号(齋藤貢)
高知詩の会通信28号(林嗣夫)

■会員の詩集・詩誌

永井ますみ詩集『夜が明ける』5月刊(私家版)
別嬢　116(高橋夏男)
現代詩神戸　280(永井ますみ)
日曜日の旅人　3号(神田さよ)
鶴鴒　19（江口節)
MAROAD Vol・181(大橋愛由等)
EDGING　54・54-1(寺田操)
あむの木通信166～169号(福永祥子)
多島海　43（江口節)
神撫」高木敏克　2023・1月刊(澪標)

■入退会・ご逝去

入会　岩堀純子
退会　後藤美香・中川道子・福田学・山中幸義・後藤美香
逝去　西村善三

■公募案内

第29回中原中也賞 応募締切令和5年12月3日
令和4年12月～令和5年11月迄に刊行された詩集
3部　山口市交流創造部文化交流課℡083-934—2717

第34富田砕花賞 応募締切令和5年7月28日
令和4年7月～令和5年6月末迄に刊行された奥付けのある詩集2冊　芦屋市教育委員会生涯学習部
℡0797-38—2091

小野十三郎賞 応募締切令和5年7月10日
令和4年7月～令和5年6月末迄に刊行された詩集
詩評論書　大阪文学学校小野十三郎賞事務局
℡06—6768—6195

＊案内・宝塚地域の　詩の教室

現代詩講座　読んでみよう　書いてみよう」
8月20日(日)13時～15時。
【場所】宝塚市立中央図書館2階研修室(阪急宝塚線清荒神駅すぐ)℡　0797(84)6121
【主催】兵庫県現代詩協会・宝塚詩の会
【定員】20人、応募多数の場合は抽選。中学生以上【参加費】無料　【申込・問い合わせ】神田さよ nrk54251@nifty.com
【申込締め切り】8月10日

■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行っており読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の方を求めています。
入会申込　野口幸雄　℡　090-7963-0090

■ホームページにあなたのエッセイを

協会のホームページ「会員寄稿エッセイ」コーナーでは、会員のエッセイを掲載しています。詩人との出会い、同人誌の思い出、研究している詩人の事、日常ふと心をよぎった事等々。積極的な寄稿をお待ちしています。
・会員ならどなたでも投稿できます。協会から直接寄稿をお願いすることもあります。
・エッセイまたは評論をお願いします。
・連載も可能です。投稿数が多い場合はあなた専用のページを用意します。
・読みやすい縦書き三段組み、縦スクロールで掲載します。
・既発表・未発表を問いません。ただし原稿は電子データでお願いします。(手書きの場合はご相談ください)
ホームページ担当理事・北野(soranohito.jp@yahoo.co.jp)まで、メール頂ければ、様式を送りします。

■会計より

順調に納入されています。なお、振込みの際は本名とペンネームの両方をお書きください。会費は4000円です。振替口座　00920-9-111243　口座名　兵庫県現代詩協会
（担当　玉川侑香）

■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局まで送ってください。「詩の現在展」として展示します。詩に関するイベント情報や会員の動静もお知らせ下さい。
◎兵庫県現代詩協会事務局　野口幸雄方
住所：657-0846　神戸市灘区岩屋北町4-4-5-902　℡　090-7963-0090
◎会報編集　《高谷和幸》　℡079-447-3652
◎印刷《遊文舎》〒532-0012　大阪市淀川区木川東4-17-31　℡　06-6304-9325